

イメージを形にして 人々の心に届く1着を選ぶ

田村さんはフリーランスのスタイリストとして、さまざまな媒体でスタイリングを手掛けています。お話からは、外側からは見えにくいスタイリストという仕事の本来のあり方に対する確かな信念がうかがえます。

スタイリスト 田村和之さん



しごとインタビュー
INTERVIEW

たむら・かずゆき●1975年、愛知県生まれ。大阪で青少年時代を送り、大学生時代に在阪のスタイリストのアシスタントを務め、後に独立。27歳で東京に移り、ファッションライターを経てスタイリストとして活動。メンズファッション誌のほか、さまざまな媒体でスタイリングを手掛ける。ファッションにこだわりを持つミュージシャン、大橋トリオのスタイリストとしても知られる。

自分の好きな分野で仕事をしたいと
スタイリストの世界へ

——もともとファッションやスタイリングに関心があったのですか。

田村 若い頃からファッションやスタイリングに興味はありました。服装が自由になる予備校生時代、メンズのファッション誌を見て自分のスタイリングをあれこれ考えたものです。友達から自分のファッションをほめられるとうれしくなりましたし、自信にもつながりました。

——スタイリストのお仕事をされるようになるまでの経緯を教えてください。

田村 実は大阪の大学に通いながら、在阪のスタイリストの下でアシスタントをしていました。というのも当時は就職難の時代で、私の周囲でも思うよ

うな就職ができずに悩んでいる人が多かったのです。そんな状況の中で、働くなら自分の好きな道に進もうと考えたというわけです。その師匠の下でスタイリストとしての基礎を身につけて、やがて独立しました。

——後に東京に移られたのですね。

田村 東京に移ったのは27歳のときです。東京は日本のファッションの発信地ですし、さまざまな情報も集約される場所です。だから東京でスタイリストとして仕事をしたいという思いは、以前からありました。

——東京に移られて、フリーランスのスタイリストとしてどのように仕事を見つけていかれたのでしょうか。

田村 当初は、ファッション誌を出版している出版社を、売り込みに訪ね歩きました。当時はスタイリストがとても多く、大阪である程度の経験を積んだからといっても、すぐに仕事が見つかったわけではありません。ただ、20代という若さもあって、それほど不安はありませんでした。むしろ新しい友達ができたり、たくさんの方の新鮮な情報に触れたり、とても楽しい日々を送っていました。

そうした中である雑誌から、「ファッションがわかる人に原稿を書いてほしい」という依頼がありました。記事を書くことに自信があったわけではありませんが、とにかくチャレンジしてみようと、その仕事を引き受けたのです。これが私の東京での仕事のスタートでした。しばらくはライターの仕事をし

ながら、取材先などでいろいろな方と知り合うことができ、それが今も生きています。そうこうしているうちに、スタイリストの仕事もいただくようになりました。

スタイリストという仕事

——具体的なお仕事はどのようなものなのか、教えていただけますか。

田村 雑誌であれ、コマースであれ、最初にクライアントからどんなイメージでスタイリングをしてほしいかという意向が伝えられます。

私はそれに従って洋服のほか、靴や帽子、時計などの小物を選ぶために、ショップやブランドのショールームを回って「これがいい」と判断したものを借り受けます。そしてそれらを用いたスタイリングを提案し、ご検討いただくわけです。つまりスタイリストの仕事は、クライアントが提示した、目に見えないイメージを具体的な形にしていくこと、と言えるかもしれません。

一度の提案で承諾をいただくことはほとんどありません。何回か提案と交渉を重ね、最終的に「これでいいこう」という決定がなされるわけです。その後、撮影に向けての準備があり、洋服に仕上がらないようにしたり、丈を詰めたりといった仕事がありますし、撮影にも立ち会います。

——撮影時にもっとこういうものがほしいとか、別なものに変えたいというような場合もあるのでは……



『men's FUDGE』（三栄書房）2018年10月号
（表紙スタイリスト：田村和之さん）



仕事をスムーズに進めるためには、ショップや
ショールームのスタッフとの信頼関係が大切。



クライアントの意向をしっかり確
認し、モデルに最もフィットする
1着を選ぶ。



「一緒に仕事をしてよかった」と 思っていたことが大切

田村 その通りですね。クライアントのイメージに合っていて、モデルとなる人によく似合うなど、さまざまな条件をクリアしたものを、決められた時間と予算内で用意するというのは大変です。だからこそ、ショップやショールームのスタッフと、どのような関係構築しているかが大切になってくるのです。信頼関係があれば新しい情報も教えていただけるし、ある程度の融通も効きます。

——お仕事の中で面白さややりがいは、どんなところにありますか。

田村 ファッション誌を読んだ方が「この雑誌の何ページに載っていた洋服が素敵」というような感想をSNSに掲載し、それがあつという間にたくさんの人に伝わる時代です。自分がスタイリングしたファッションがそうしたSNSで話題になることはとても嬉しいですね。もちろん俳優さんなどモ

デルとなった方やそのファンの方が喜んでくださることも嬉しいです。

自分もかつてファッション誌を夢中で読んで時間を忘れることが度々ありました。みなさんにそうした楽しさを提供しているんだという思いも、やりがいにつながります。

——お仕事の中で、難しいと感じるのはどんなところでしょうか。

田村 スタイリストは、クライアントに強くアピールしようとする意識があつて、スタイリングするときに自分の個性を出してしまいがちです。でもそれは、自分の個性を相手に押しつけていることにほかなりません。

スタイリストにとって一番大切なのは、クライアントやモデルの方のためにどれだけのことができるか、さまざまな条件を満たすために何ができるかということです。そしてクライアントやモデルの方に「このスタイリストと仕事をしてよかった」と思っていたことがとても大切なんです。個性はそれほど意識しなくても自然ににじみ出てきますから。

あえて個性を抑え 先走りしすぎない

——普段から感性を磨くことも大切だと思いませんか？

田村 若いころは海外のファッション誌や映画、音楽などに接して、その後にあるカルチャーを含めて感性を磨くことを心掛けていました。今は、一

般の人になかなか手が届かないそうした特別な世界よりも、街中で情報を得たり、フォロワー数が多いファッション関連のインスタグラムを見たりして、人々に影響を与えているスタイリングを研究しています。

心掛けているのは、先を行き過ぎてはいけないということです。普通よりも少しだけ先を見据えたスタイリングが重要なんです。先走り過ぎると反響がありませんし、それはスタイリストの自己満足に過ぎないと思います。

——これからスタイリストを目指す若い人たちに、アドバイスをお願いします。

田村 正直、アドバイスするのはとても難しいと思います。というのもこの世界はとても厳しく、一度はスタイリストを目指しながらも挫折していった若者は少なくないからです。

それでもあえて申し上げるなら、まずはファッションや服のことが誰よりも好きと言えること。

あと、言葉では伝わりづらいですが、精神的にも体力的にもきつい仕事です。厳しいことを言いますが、単に感覚や技術を鍛錬すれば成功できるわけでもないですし、人付き合いやコミュニケーション能力が高いからといって、うまくいく仕事でもないです。頑張った時間が報われるという保証もありません。

それでもファッションが好きだから乗り越えられると言い切れるのであれば、是非スタイリストを目指してみてください。